

時代遅れ

小倉 一純

社史編纂^{へんさん}というと、ドラマや映画には時々、社史編纂室というのが登場して、左遷^{させん}部署の代名詞みたいな描き方をされてきた。

実は僕の父も若い頃、社史編纂の仕事に携わっていた。当時、我家は父が勤務する日本電信電話公社の2DKの官舎に暮していた。今から半世紀以上前の話である。

その頃は週休二日制ではなく日曜日だけが勤め人の休日だった。その日曜日ともなると、父は、座卓に座布団、両切りピースに灰皿にお茶、そして万年筆という道具に囲まれて、丹前^{たんぜん}（着物の一種）を羽織って原稿用紙に向かい筆を走らせていた。

内容は、電々公社の技術史である。父は文科系の卒業だったが、文才を買われて、正規の仕事のほかに、その編纂を任されていた。現在でも我家にはその時に出版された分厚い百科事典のような技術史が眠っている。

ただ、そこには父の名前はない。所属していた部署の課長の名前だけが記されている。

父の話によるとその課長は一行も書いていないそうだ。時々ページをめくってみるのだが実によく書けている。

そんな父に僕は子供の頃から「文章は人物なり」といわれながら育てられた。

「東大出です、京大出ですといって、毎年新人が入って来るけど、ちよつと文章を書かせれば、すぐにその人となりが分かってしまう」

これが父の口癖だった。文字に関しても、同様の考えを持っていた。父は現役時代、なかなかの達筆であった。

現在では、名立たる企業の社長でも、まるで高校生のような文字をお書きになる。もつとも今ではこれが普通なのだと言もよく知っている。

文章に関しても、例えば作家などは、腕を磨いて上手い文章を綴^{つづ}るべく努力をする。文章というものは一、二年で簡単に上手くなるわけではない。五年あるいは十年単位で成長するものだ。文章にはその人の人柄や基礎学

力などすべてが出る。文章は単なる「てにをは」ではないのである。

ところが現在では、作家に、文章の上手さは期待されていないようだ。

今時の若い作家にはユニークな「世界観」とか「キャラクター」の設定、およびその組み合わせの妙が求められている。

それをクリアできる、センスのいい若者なら、三年で金を稼ぐ作家になることもある、という。

僕が新卒で勤務した会社にも、仕事の傍ら文章を書いている人がいた。

僕はその頃、製鉄会社の本社にいて、部署は総務部・健康保険組合だった。隣が総務部・持株会で、いってみれば両方とも社業とは直接関係のない出世コースからは大幅に外れた部署であった。

健康保険組合の課長は国立静岡大学出身だった。ただし中退である。家庭の事情があり折角入学した大学を途中で辞めざるを得な

かった、という。

その課長が小説家志望だった。小さな文学賞で既にいくつかの賞を取っていた。そういう意味では、サラリーマン作家と呼ぶのが相応しかったのかもしれない。

その隣席に都立大を卒業した係長がいて、その日も、ある社員の実家住所の漢字が分からないといって課長に小声で質問していた。

「あつみ半島ってこれでいいですか？」

渥見、と書いたメモを渡すと課長が、

「これ、見、じゃなくて、美、と書くんじゃないの」

「はあ、そうなんですか？」

「はあじゃないよ、まったくもう。君さ、いい大学出てるんだろ！」

こんな会話が対面の席であつた。僕も他人事ではないと思い傍観していたが、今になると、その時の課長の気持ちがよく分かる。

小説家でもある課長が日本各地の地名などに詳しいのは当然だ。そんな課長には、隣の

正式な大学卒である係長がよほど情けなく思えたのだろう。

近頃は、文章や文字にはさほど気を遣わず、効率よく、間違いもなく、意志が伝われば、それでOKである。漢字変換だって、アプリにお任せだ。今の世の中では、そういう風潮になっている。

スマホが主流の現在、句読点も限りなく少なくなっている。自宅近くの小学校の校長先生が書いた「学校便り」の文章などもそうだ。句読点は驚くほど少ないが、実に要領よく分かりやすく書かれている。町内会の回覧板に毎回掲載されている。

まずは十年を目途に文章修行を始めたが、そんな周囲の実情を汲むと、僕は今、時代遅れの真っ只中である。

なんと恐ろしいことになっているではないか。でもこれでいいのだ、という妙な信念も同居しているのである。